

## 連携を軸に保育の要点を探る ―保育カンファレンスを通して考える―

○田中三保子 榎田正子 吉岡晶子 伊集院理子 上坂元絵里 高橋陽子 尾形節子 清宮聡子  
(お茶の水女子大学附属幼稚園)

## 1. 園 齢

私たちは園内研究として、昨年度までに過去5年間にわたって継続的に保育カンファレンス(カンファレンスと略す)を行ってきている(その成果については「保育カンファレンスの検討・その1~4」に発表)。カンファレンスでは、保育者の一人が事例を提出し、その主観に寄り添いながら子ども理解や援助のしかたなどについて全員で検討することを重ねてきた。その結果、それぞれが自分の保育の特徴を自覚し調整しながら自分らしく保育できるようになるとともに、ほかの保育者の保育についても分かりあえるようになってきた。そして互いに保育を託しあい、連携がとれるようになってきている(保育カンファレンスの検討・その3、参照)。そこで今年度は、事例をもとに保育者のよりよい連携の方向を探りながら、私たちが共通に重要と考えている保育の要点は何かについて考察する。

## 2. 方 法

月2回、1回約2時間のカンファレンスを通して全員で検討する。参加者は8名(担任教諭6名、教頭・フリーの保育者各1名)。カンファレンスの回数は4月から12月まで計14回である。第5~7回は連携の事例3例について1回ずつ話し合い録音した。各々についてテープおこしをし、その逐語記録をもとに1回ずつ話し合った(9~11回)。さらに9~11回の逐語記録について検討する機会ももった(13~14回)。

## 3. 経 過

## (1)第2・3回カンファレンス(1999. 4.28・5.17)

今年度のカンファレンスの進め方について話し合う。前年度までは、一人一人の保育者のその時々の主観から浮かび上がる問題に焦点を当てて話し合う形態をとってきたが、今年度は保育者の連携をテーマにしたかどうかの提案を検討し、その方向でいくことになる。話し合いのもととして、たまたま4月28日に話題にでた4歳児の事例をとりあげることになり、次回までに担任、フリーの保育者(フリーと略す)それぞれが記録を書き、配布しておくことにする。

## (2)第4回カンファレンス(1999. 5.25)

この回の後半に、フリーの提出記録を中心に担任の記録と重ね合わせての話し合いがもたれた。その中で事例の女児たちが、前年度の保育室にも行っていたことが分

かり、前担任も記録を提出することになる。

## (3)第5回カンファレンス(1999. 6.16)

前回に引き続き4月28日の事例について、各保育者がそれぞれの立場で話し合う。

## 事例の概要

4歳女児3人が前年度の保育室に行き舞台を作りたいと言う → フリーの援助で遊戯室に移動する → ワッフルブロックで家を作る → 2人が加わり、お家ごっこをする → フリーが去り、入れ違いに担任が遊戯室に来る → 前年度担任が3歳女児とともに遊戯室に来て声をかける

連携に関しては、前担任は「フリーがいなかったらどう切り抜けられたか分からない、今(受け持っているクラス)の子も前の子もどっちも中途半端になっていた」、現担任は「何かをやりたい子どもの思いを転換するというフリーの働きかけがなければ、この遊びは生まれてこなかった」「分かっててフリーに託しているというより、本当に大きな部分を知らない間に支えてもらっている」と感じていること、フリーは「担任が行かれない場所に私はいるべき」「ある程度場を作ると子どもたちはどんどんイメージで遊び始めるので、ずっとここにいた方がいいのかは途中から考え始める」「担任にどうつながかはすごく考えてしまう」ことがわかった。保育者の立場の違いについては、フリーは「目の前で起こっていることが、一番(判断する基準になっている)」「担任に比べれば(途中で)呼ばれることが少ないので(じっくり関わって)、遊ぶときはプラスになることもある」、担任も「(フリーは)中途半端でいなくならなくて済む部分があって、子どもたちの側にはその良さがでてる」と考えていることがわかった。また、担任は「遊びだしから関わると子どもや遊びの見え方も違ってくるが、なかなかできないので、フリーに関わってもらい伝えてもらおうと、子どもの遊びの見方をひろげてもらえる」と感じており、フリーも「(子どもとの間で)受けて、返してということをしつかりすると、見えてくるものもいっぱいある」「遊びの経過をちゃんとキャッチし担任に返すことで、担任のその子のとらえが増える」と思っていることがわかった。どの保育者も「大人が引っぱりすぎるわけじゃなく、子どもだけで作っていくのとも違う状況で」「子どもたちが自分で動き出して自分たちのイメージで遊べるようになったら、もう子どもたちの世界

に託していく」「場作りの上に何か状況ができると、遊びが充実する」と感じていることもわかった。

#### (4) 第9回カンファレンス(1999. 9.14)

第5回のテープおこし記録をもとに話し合いが行われた。その中でわかってきたことは次のようなことである。連携に関しては「共通に思っている部分があるから、そこから先はその人らしく関わってもらった方が、と思っている」「(フリーが)担任とは違う関わりをしてあげることが子どもにとってとてもいい、違う体験をして子どもの中にも何か残るものがあるのかもしれない。担任は今のことや一緒に背負ってきたものがあってつい感情的になってしまうことがあるから」「フリーは、担任の気持や考え方と自分がそこで直感的に読みとったことから、自分なりに行動して(くれて)いる」「(お互いに)こうしてくださいって言わないように基本的なことだけ伝えて、その先生自身が判断できるように(したい)」。保育者の関わり方については「子どもの自主性、主体性を育てるといって子どもに全部委ねてしまったら、ここまでの遊びはできなかった。大人の関わった意味がある。子どもの主体性が伸びるか、先生が方向づけてしまうのかの分かれ目がどこにあるのか、いつも探りながら引く時も含めて関わっている」「先生が引っぱるのではなく、イメージを膨らませながら『こういうの、どうかしら』ってやりながら進めていく。その積み重ねで、子どもたち同士で場を作りながらイメージを膨らませて遊べるようになる」「受けて返す中に、大人が子どもを探っている部分と、子どもも自分たちの心の中を探っている部分とがある。大人に受け止めてもらって返してもらうことで、自分たちのイメージを探っている過程がある」「こちらがその子の先に行きたい気持を何とか実現したいと思ってやっていると、子どもたちは結構こちらに重ねたことを言ってくれる」「子どもにきちんと手をかけることの中から、子どもが自分でやる力を育てている。手をかけるのも(そのことが)目的ではなく、自分でやろうと思えばやれるやり方が伝わるし、自分に気持を向けてもらう中から人やものに気持を向けることを育てるのが大きい」

#### (5) 第10回カンファレンス(1999. 9.27)

第6回のテープおこし記録をもとに話し合う。連携に視点を当てて考えると、どの保育者も「(子どもを)受け取ったところでその先自分が何ができるか」「(その状況と)情報とを併せて(その子にとっての)最善を考えている」こと、フリーは「子どもと向き合う(必要がある)状況では、まずは担任のところへと考える」「今その子が直面している発達課題を担任はより分かってい

るのだから、それを尊重したい」担任は「子どもが色々な人と関わることも大事だし、一貫した体験になることも大事」と考えていることがわかった。

#### (6) 第12・13回カンファレンス(1999.12.8・11.30)

第12回では、今までに同じ事例をもとに2度ずつ話し合ってきたことをどうまとめるか検討した。そこで、分担して9～11回の記録テープを聴き、保育の要点をあげてみることになった。第13回では、分担者のまとめの発表とそれについての話し合いが行われた。まとめられたことについて考えていくと、前回、前々回の発言は、その真意はどうであったか等が改めて話し合われることになった。それは、カンファレンスでその人なりに感じとってきたことを見つめ、他の人の感覚とつき合わせる機会ともなり、その結果、各自が自分の感覚をより明確にし、共通の認識として確認することができた。

#### 4. 考察

連携の要点を探ろうとしてカンファレンスを重ねる内に、私たちは、保育者間の保育に対する共通認識の重要性に気づかされた。共通認識が基盤になってこそ互いに信頼しあった連携が成り立つ。カンファレンスを通して見えてきた保育の要点ともいべき私たちの共通認識をあげると次のようになる。ここで示すのは今の時点で私たちが合意できる部分をおおまかにまとめたものである。①個々の子どもの状況や発達課題をふまえて今どうしたら一番いいか考える。②立場の違う保育者が主体的に関わることで子どもの中にも色々な面が育つと考えている。③子どもに手をかけ気持をかけることを通して自分でやる力を育てる。④子どもの思いやイメージを引き出し膨らませ、子どもと一緒に実現していく過程を大事にすることで、自分たちで遊びを作り広げる力を育てる。⑤子どもの思いに真摯につきあうことで、子どもが人やものに一所懸命向き合う姿勢を育てる。

私たちが大切にしているのは「一人一人に即した保育であり、それを通して子どもたちの自主性・主体性を育てること」であると、それぞれが改めて自分の実感として確認することができた。

今年度のカンファレンスでは、事例を通して浮かび上がってきた要点について話し合いを3回繰り返す形をとってきた。同じ内容について何度も考えていくと、何となく分かっていただけのことも次第に明確になって、自分の言葉で表現できるようになる。今回は連携に焦点を絞ったので、話題にならなかったこと、話題にはなったがふみこんでは話せなかったことも多々ある。カンファレンスを通してさらに私たちの保育に関する共通認識を探っていくことが今後の課題である。